



プロの背中

ベトナムでの無償手術に、眼科医の服部匡志(47)が取り組むようになったきっかけは、10年前、学会で出会ったベトナム人女性医師の訴えだった。

「ベトナムには手術を受けられずに失明する貧しい患者が多い。助けてほしい」

服部は思いを巡らせた。眼科病院の勤務医として手術経験を重ねること8年。網膜硝子体の分野ではエキスパートの一人に数えられている。自分の技術がもっと求められる場でやりたい。服部は挑むことにした。

どんな手術も引き受ける

毎月2週間ベトナム入りし、主に首都・ハノイの国立眼科病院で診療にあたる。請け負う手術は年に約800件。日本の大



顕微鏡をのぞき込み、網膜の手術をする服部さん(右)。緊張の作業が続く(3月、ベトナム・ハノイで)

海を渡る赤ひげ ②

ご感想を、〒560-0855-1(住所不要)読売新聞大阪本社社会部へお寄せください。ファックスは06-6666-1073。メールはosaka2@yomiuri.com.jp。

手遅れ寸前になってようやく来院する重症者が多い。

3月9日、服部に回された男性患者もそうだった。「増殖性硝子体網膜症」。右目は失明し、左目も視覚を感じる網膜が眼底から剥がれてほとんど視力が無い。田舎から来たといい、やせて身なりも汚れていた。

「剥がれてしわくちゃの網膜をうまく広げられるか。それには、網膜に癒着した無数の増殖膜を取り除かねばならない。服部へばりついたガムをきれいに剥がすような、根気のいる作業になる。誤って網膜を傷つけたら万事休すだ。」

「ホームローラン(大丈夫)」。服部はベトナム語で男性を励ますと、左目に内視鏡を入れた。手術環境は心もとない。モニターはブラウン管テレビで代

用。手術器具も古い。それでも服部は指先に神経を集中し、ピンセットで手際よく膜を剥がしていく。2時間半後、膜はすべて消えた。出血は皆無だ。

続いて服部は眼内に薬液を注入した。その圧力で網膜を広げようというのだ。8年前、まだ珍しかったこの手法を幼い男児に使い、「人体実験」と非難されたのを思い出す。「いける、か」。思わず声が出た。しばらくして網膜が眼底を覆うように広がり、服部は安堵した。1週間後、男性は光を取り戻した。

この日、服部は4件の手術をこなした。10時間ぶつ通しで働くこともある。「どんな手術も引き受ける。困っている人を放ってはおけん」。手術の時間以外は、好物のカツカレーを食べながら寝ているだけだ。(敬称略)